

五行で綴る詩1

茶野椀孤

時のあめだま

舌のうえでころがす
時間は徐々に小さくなる
甘くもしょっぱくもあり
元の大きさには戻らず
自分だけのあじ

恋でも溶けない

氷がとけていく

熱はあなたがみなもと

溶けきれずに残った

冷たい私のところは

とわにさびしさを告げる

見ず知らず

見ず知らずの私を
つねに私は怖れて
見て見ないふりをして
けれども意識している
確かにそこにいる

後悔

後悔をして

また後悔をして

山ほど積み上げられた悔いを

崩して笑ったとしても

またまた後悔をして

私のことばを

あなたは間違っカイシャク

あなたのことばを

私は間違っカイシャク

でも笑いあってる

うすっぺらい

陽に照らされて影
あなたに照らされて私
どちらもうすっぺらくて
陽とあなたとにあこがれ
まぶしさについ目をふせ

バーチャルふるさと

今年も帰ろう

想像上の

ふるさとへ

いやされ

なつかしむふり

そんなあたしを

きらいだ

あたしがきらいだ

百度となえる

そんなあたしを

あなたは好いた

ちょっとだけずつ

ちょっとだけ

ちょっとだけ

ちょっとだけ

ちょっとだけ

大いなる妥協

のこす

残したいもの

残さねばならないもの

それらを探している途上で

死すれば何も残らないのか

途絶えるのかわたし

つまみ

昨日見た

あなたの夢と

あの日見た

だが果てた夢とで

やけざけ

透視

妙に気取ったポーズで
わたしを凝視している
ヒフを透かして視ている
心の中まであなたは
入ってわたしの悪の

冷気にさそわれる

かじかんだ花が
夜ごと寒さをなげく
くるおしく
美しく冷たく
私をさそいこおらす

助走

ふるい悲しみに
費やした半生を
助走にし
新しい悲しみを
いま飛ぶ